

子どもを理解し言葉の発達を支える保育者の養成

大澤亜里 星 信子 秋山ゆみ子

要旨

本稿は、保育士資格および幼稚園教諭二種免許状取得のための必修科目「保育内容(言葉)」の授業実践について報告をし、その成果と課題を明らかにするものである。「保育内容(言葉)」では、子どもの言葉や表情、行動などから子どもの内面や援助のあり方について考察すること、それについて他者と意見交換をする中で様々な捉え方や考え方に気づくことを通して、子どもの言葉の発達を支える上で必要な保育者の態度を習得することを目的に、「子どもの言葉を通して子どもを理解する」というテーマで3回の授業を行っている。第1回目は観察記録をもとに子どもの内面および保育者の援助について考察する個別ワークを、第2回目はそれをもとにグループで意見交換を、第3回目は各グループから出された観察記録・考察をもとに全体交流を行った。2015年度(初年度)および2016年度の授業実践を通して、受講学生は子どもの内面や援助のあり方について考察すること、また他者と意見交換をする中で様々な捉え方や考え方に気づくことができた。さらに実際の子どもの姿を通して言葉の発達過程を理解することができた。しかし、それに応じた言葉の発達の援助については十分に考察することができなかった。

キーワード：子ども理解、子どもの言葉、言葉の発達

1. はじめに — 本稿の目的 —

本稿の目的は、保育士資格および幼稚園教諭二種免許状取得のための必修科目「保育内容(言葉)」の授業実践について報告し、その成果と課題を明らかにして今後の授業のあり方を検討することである。

保育内容の領域「言葉」では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」¹とされているが、そのために保育者は子どもの話す言葉に耳を傾け、子どもが経験したことや経験していること、考えたことや考えていることを理解する必要がある。そしてその上で、一人一人の子どもに応じた援助をすることで、子どもの言葉は育まれていくと考える。

また国連子どもの権利条約において、子どもは自由に自己の意見を表明する権利を有すると明記されていることは周知の通りであるが²、子どもの権利委員会が提出した「乳幼児期における子どもの権利の実施」に関する一般的意見7号(2005年)の中では、乳幼児が「さまざまな方法で選択を行ない、かつ自分の気持ち、考えおよび望みを伝達している」こと、したがって大人は「子ども中心の態度をとり、乳幼児の声に耳を傾けるとともに、その尊厳および個人としての視点を尊重することが必要」³であると述べられている。

「保育内容(言葉)」では、以上で述べた子どもの言葉の発達を支え、子どもの意見表明権を保障する上で必要な保育者の態度を習得することを目的に、「子どもの言葉を通して子どもを理解する」というテーマで3回の授業を行っている。授業の取り組みとしては2015年度と2016年度の2年間とまだ浅いため、今後に向けて本テーマの授業実践について振り返り、課題を明らかにすることが必要であると考えられる。

2. 授業「子どもの言葉を通して子どもを理解する」について

(1) 授業の目的

本保育科では演習科目「保育内容(言葉)」を1年生の後期に開講している。2015年度は1クラス53人の2クラス合計106人が、2016年度は1クラス54人の2クラス合計108人が受講した。半期15回の授業の内、3回を「子どもの言葉を通して子どもを理解する」というテーマで行っている。

本テーマの授業の目的は、第一に、子どもの言葉や表情、行動などから子どもの内面を理解し、援助のあり方について考察すること、そして第二に、それについて他者と意見交換をする中で様々な捉え方や考え方に気づくことである。子どもを理解しようとする事、そしてそこから援助のあり方を考えることは、前述した通り、子

1 厚生労働省編(2008)『保育所保育指針解説書』フレーベル館 p.88 および文部科学省(2008)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 p.138

2 解説教育六法編修委員会編(2015)『児童の権利に関する条約』解説教育六法2015平成27年版』三省堂

3 平野裕二訳「子どもの権利委員会 一般的意見7号(2005年)乳幼児期における子どもの権利の実施」p.5 http://www.nichibenren.or.jp/library/ja/kokusai/humanrights_library/treaty/data/child_gc_ja_07.pdf

どもの言葉の発達を支える上で、また子どもの意見表明権を保障する上で必要不可欠な保育者の態度である。また、自分自身の子ども理解の仕方や援助に対する考え方について他者と意見を交わすことは保育者になってからも求められる。そこで本授業を通して、学生自身がこれらの意義を感じ取ることを期待した。

(2)授業の進め方

2015年度と2016年度はほぼ同様の方法で授業を進行したが、2016年度は1年目の取り組みを通して改善した点がいくつかあったため、それについては各年度の進め方を示し、変更の経緯を述べる。

本保育科では「教育実習Ⅰ」という2年通年の授業を開講しており、1年次には週に一度、附属幼稚園で観察実習を行っている。学生は自由遊びの時間と設定保育の時間における子どもたちの様子を隔週で観察している。本授業は、この「教育実習Ⅰ」の授業の中で子どもの言葉に着目して観察した時の記録をもとに進めた。

授業の第1回目は、上記で行った観察記録をもとに、子どもの発話およびその時の表情や行動と観察時の状況を、①子どもの語り(ひとりごと)、②先生との対話・会話、③子ども同士の会話(以下、適宜①、②、③と記す)ごとに整理し、ワークシートに記入した後、子どもの内面について各自考察した。2015年度は子どもの内面について考察するように指示するのみであったが、初年度の取り組みを通して保育者の援助のあり方についても考察する必要性を感じたため、2016年度は子どもの内面および保育者の援助についても考察するように指示をし、ワークシートにも「考察(子どもの内面、保育者の援助のあり方)」と記載した。ワークシートに記入するに当たり、その時の観察実習を欠席していた学生がいたため、子どもの言葉に着目して観察した時の記録だけでなく、これまでの観察記録をもとにワークシートに記入しても良いことを伝えた。また①あるいは②に関する観察記録がなく、ほとんどが③に関する記録という学生もいた。その場合は、ワークシートの①や②の欄を使用して③の記録を記入しても良いことを伝えた。

第2回目の授業は、第1回目の授業で作成したワークシートをもとにグループで意見交換を行った。2015年度は出席番号順に4、5人のグループを編成した。2015年度の学生の感想から、同じクラスを観察している学生同士の方が同じ場面を見ている可能性が高くなり議論が活発になると感じたため、2016年度は観察クラスごとに分かれて、その中で3、4人のグループを編成した。意見交換の際には、自分の考察に対するグループのメンバーの意見を青字で、それに対する自分の再考察を赤字でワークシートに記してもらった(図1.グループディスカッション後のワークシートを参照)。グループのメンバー全員の記録について意見交換を終えた後、グループの中で①、②、③についてそれぞれ1、2場面選び、書き出してもらった。

第3回目の授業は、第2回目の時に各グループから出してもらった①、②、③に関する記録と考察を全員に配布し、全体交流を行った(図2.配布資料の一部を参照)。全体交流ではグループごとに観察場面とそれに対する考察を発表してもらい、それに対して質問や意見交換をするという流れで進めた。第3回目の授業の最後に、個別ワーク、グループディスカッション、全体交流の3回の授業を通しての感想や難しかった点などを自由に記述してもらった。

3. 2015年度の授業実践

(1)学生の授業への取り組み ※学生の記録および考察は原文のまま記載

第1回目の授業の個別ワークでは、観察記録から①子どもの語り(ひとりごと)、②先生との対話・会話、③子ども同士の会話について、それぞれ1～3場面書き出し、考察を行っていた。子どもの内面についての考察からは、観察場面の状況や子どもの発話、その時の表情や行動から、子どもがどのような気持ちで言葉を発しているのかを理解しようとする姿勢がうかがえた。また「(年少さんは：筆者)年長さんの場合とは異なり、言葉にすることで直接誰かに助けを求めたりすることはできず、周りに気づいてもらいたいような姿(で示すもの：筆者)なのだなぁと思う」というように、子どもの発達過程などに関する自身の知識やこれまでの経験から理解しようとしていたものもあった。一方で、「Yくんは…自己中心的である」や「H子は面倒見が良いと考えられる」など、概念的な理解で終わっている場合もあった。初年度は子どもの内面について考察するようにとしか指示をしていなかったが、②のところでは保育者の援助についても考察している学生がいた。その中には、例えば「子ども自身が理解できるように先生が努めているなと感じた」など保育者の援助の意図に関する考察や、「子どもの気持ちに寄り添っ

3. 子ども同士の会話

(場面・状況)、「発話」、表情、行動など	考察 (子どもの内面、保育者の援助のあり方)
<p>(年長、自由遊びの時間)</p> <p>A男(年長)「ゲットしたー」</p> <p>B男「B男くんの分は?」</p> <p>A男「ダメー」</p> <p>A男は黒いラキューを手に持ち、別のプロックで遊んでいたB男の所に持っていた。</p>	<p>A男くんは自分が見つけた黒いうちを誰かに見せたからたのびと考える。一方、ラキューを見せられたB男くんは自分の分も持ってきてくれたのではないかと思ひ、A男くんに「自分の分は?」と聞いたが、A男くんはA男くんが持っている黒いうちを欲しがってると思ひ、「ダメ」と答えたのだと思ひ、保育者はA男くんが「B男くんの分持ってきてあげようかな?」と声をかけると良いのではないかと思ひ、</p>
<p>(年長、自由遊びの時間)</p> <p>C男「Eちゃん、助けて。車にあわわわてやて!」</p> <p>E男「しよーがないなー」</p> <p>C男が車を作って遊んでいる所にD男が別のプロックで作った車を持って近付き、C男はE男に助けを求めた。E男は白い綿を持ってD男に近付く。</p>	<p>C男くんは、D男くんに自分の作った車が攻撃されたと思ひ、E男くんに助けを求めたと思われる。</p> <p>保育者は「A男くんに対して何がダメなのか、どうしてダメなのかを聞き、それをB男くんに伝えるという援助をする。」</p>
<p>(自由遊びの時間、年長組の保育室)</p> <p>C男「キャー Eちゃん、あわわわして」</p> <p>E男「えー」</p> <p>E男は綿を持ってD男の所へ行く。D男は保育室内を走り回り、C男の所へ行き、C男のおもちゃを取ろうとする。</p> <p>C男「やめて! やめてよ」</p> <p>D男「ごめんね」</p> <p>C男「先生に言うよ!」</p> <p>D男「ごめんね」</p> <p>C男「いいよ」</p>	<p>D男はC男と一緒に遊ぶために何度もC男に近付いたのではないかと思ひ、何度もC男に近づくうちに車に攻撃されたらあわわわになるんじゃないかと思ひ、C男の車に何かしたのではないかと、C男は、車に何かさせて最初は怒っていたけど、D男がすぐ謝ってくれたから「いいよ」と言ったのだと思ひ、D男は自分のしる事が良くなかったからC男が怒った事に気が付き、すぐに謝ったのだと思ひ、</p> <p>保育者はまずC男くんに対して叩いた事を注意し、D男くんには「おもちゃを取る前に言葉で使いたいと言おうね」と注意する。</p> <p>「C男くんは、おもちゃを取られるのが嫌でD男くんのことを叩いてしまったのはわかたけど、叩くのは良くないよね」とC男くんに対して言葉掛けをし、D男くんには「何が良くない行動だったかわかる?」と聞き、自分の良くない行動に自ら気付けるよう援助をする。</p>

同じ人物、
少くも1人

自身の再考察

グループの意見

自身の再考察

図1. グループディスカッション後のワークシート

た対応をすることでやる気を引き出したりできるのだと思つた」など保育者の援助のあり方に関する考察がみられた。また、「先生の観察力がすごいと感じた」など、保育者の援助について評価するような記述もみられた。

第2回目の授業のグループディスカッションでは、出席番号順に4、5人のグループを編成した(全12グループ)。子どもの内面についての考察がグループ内で同様だった場合、「みんな同意見」の一言で終わっていることもあったが、大半はグループのメンバーの意見と、それに対する自分の意見や考えが記述されており、特にグループ内で異なる捉え方ができた時にはメンバーの意見をもとに再考察を行っていた。例えば、「教室内で男の子3人がそれぞれ声(奇声?)を上げて走りまわっていた」場面について、観察者は「声を出しながら走ることに楽しみを覚えていたのかもしれない。また数人で一緒に声を上げることがおもしろいと感じたのかもしれない」と考察し

ているのに対し、グループ内では「コミュニケーションをとっていたのかもしれない」や「(3人で)何かの真似をしていたのかもしれない(〇〇レンジャーや恐竜など)」という意見が出ている。それについて観察者は「途中から教室に入って観察をしていたため、もしかしたらごっこあそびをしていたのかもしれないと思った。ある一部だけを見て決めつけてはいけなと感じた。奇声でコミュニケーションを取っていたという考えはざんしんでとてもおもしろかった」と自分の理解の仕方を反省しながら考察を深めていた。

第3回目の授業の全体交流では、最初は学生から質問や意見が出てこなかったが、同じ場面をみた人がいるかなど、科目担当者が全体に対して問いかける中で、少しずつ発言する学生が出てきた。また様々な視点から考えられるように問いかけの仕方を工夫したが、全12グループに発表してもらうのに時間を要し、議論の時間を十分に確保することができなかった。

(2)学生の感想から ※感想は原文のまま記載、傍点は筆者によるもの

第3回目の授業の最後に「子どもの言葉を通して子どもを理解する」というテーマで行った3回の授業を通しての感想を自由記述形式で書いてもらった。その中には、「個人ワークをすることでしっかりと子どもの内面的を考へて、どうしてなんだろう…と考えることができました」や「観察中の会話を通してどのような状況だったのか振り返ってみてどのような気持ちだったのかどのような表情だったのかじっくり考察することは今後子どもと関わる上でとても貴重な授業だなと思った」など、子どもの内面について深く考察することやその重要性に気づくことができたという内容の感想が多く見られた。また、「子どもたちの本当に思っていること、内面の気持ちを考えることも難しいと感じました、言葉のうらにある子どもたちの考え、思いなどを上手くくみとって接していけたらいいなと思いました」などのように、子どもの内面を理解することが難しいという内容の感想も非常に多く見られた。

また「1つのエピソードをみんなで話しあうと自分とは違う新たな視点で考えられるきっかけになりました!!」など、他者の意見を聞くことで視野が広がったという内容の感想を多くの学生が挙げていた他、他者と「話し合うことは重要」であるという感想や「保育者にとって話し合うことは必要不可欠なこと」であるという感想も見られた。

その他にも「いつも観察しているのが年少さんなので、他のクラスや年齢の違う子はこんな発言をしているんだ!とくわしく知ることができました」や「普段自分が観察しているクラスの子や保育者とは別のクラスの観察をしているグループの話を聞いていると年少と年長など発達過程の差が明らかとなるような言動もいくつかあり全体交流の時に他のグループの発表を聞いていておもしろかった」など、普段観察していない学年の子どもの言葉からその発達の違いに気づくことができたという内容の感想も多く見られた。

2015年度は保育者の援助のあり方について考察するように指示をしていなかったが、「どのグループの先生の対応をみてもそれぞれちがいが、保育者自身の保育観や大切にしていることが会話、ことばとして出てきていました。(中略)私だったら子どもに対してこう言うなど、少し考えました」などの感想があり、保育者の援助についても考察したことがうかがえた。

(3)成果と課題

2015年度の授業実践を通して、学生は子どもの言葉や表情、行動などから子どもの内面について考察すること、他者と意見交換をする中で様々な捉え方や考え方に気づくこと、またそれらの重要性に気づくことができたといえる。さらに、年少、年中、年長クラスの子どもの言葉の発達の違いに気づくことができた。初年度は子どもの内面について考察するようにとしか指示をしていなかったが、保育者の援助についても考察している学生がおり、その必要性に気づくことができた。

学生がワークシートに記入した内容や感想から、観察クラスごとにグループを編成すればメンバーが同じ場面を見ている可能性が高くなり、より深い議論ができるのではないかと感じた。またそのようにグループを編成すれば、全体交流での発表を学年順に行うことができるため、発達の違いがより見えやすくなるのではないかと考えた。

4. 2016年度の授業実践

(1) 学生の授業への取り組み ※学生の記録および考察は原文のまま記載

第1回目の授業の個別ワークでは、2015年度と同様、観察記録を読み返しながらかワークシートに①、②、③のそれぞれについて1～3場面を記入し考察していた。子どもの内面については、昨年と同様、言葉だけでなく観察場面の状況や発話時の表情、行動から理解しようとしていた。ごく僅かではあるが、「B男はこだわりが強く」や「こっそりやりとりするのは女子特有のものかなと思った」など概念的な理解にとどまり、子どもの内面について深く考察できていない場合もあった。2016年度は、子どもの内面だけでなく保育者の援助の意図やあり方についても考察するように指示をしたので、多くの学生が保育者の援助について考察をしていた。例えば、「保育者が自分の考えを押しつけることなく、製作に関してはあらゆる言葉を用いて次に繋がるような言葉掛けをする」などのように、どのような援助がいいか、自分だったらどうするかについて考察していた。また「久しぶりに園に来た〇〇くんが不安になったり来にくいという気持ちになるべくならないような声掛け、心掛けを行っているとかんじました」など、保育者の援助の意図に関する考察もみられた。

第2回目の授業のグループディスカッションでは、2015年度の授業実践を踏まえて、観察クラスごとに分かれて3、4人のグループを編成し意見交換を行った(全14グループ)。そうすることでグループのメンバーが同じ場面をみていたり、観察した子どもの別の場面の姿をみていたりすることがあり、考察が深まっている場合があった。例えば「バカ」といっていたB君の姿から「バカではなく、他の言葉を言いたそうだったが、バカしか言えなくて悔しそうだった」と考察した学生に対して、グループのメンバーが「その後もバカを連呼して人のことをたたいていた」とコメントを述べており、そこから観察者は「お家で何かあってイライラしてバカと言ったのかもしれない」と再考察していた。このように自分が観察していない場面における子どもの姿を知ることで考察が深まっている場合がいくつかあった。

第3回目の授業の全体交流では、昨年よりもグループ数が多かったため、学生からの質問や意見を受ける時間がほとんど確保できないと判断し、科目担当者が、観察場面の前後やその時の状況についてより詳しく分かるように説明を求め、発表者が答えるという形で進めた。2015年度は年少、年中、年長が混ざった状態で発表をしたが、2016年度は言葉の発達過程がより見えやすいように学年順に進めていった。

(2) 学生の感想から ※感想は原文のまま記載、傍点は筆者によるもの

第3回目の授業の最後に書いてもらった3回の授業を通しての感想の中には、「1人で観察を振り返ると、あのときはこう考えていたのかな?とじっくり考えることができました」や「自分で書き出してみると、その子の行動や、保育者との関わりなどについて、より深く考えることができ、良い機会になり、よかったです」など、2015年度と同様、子どもの内面について深く考察できたという感想が多く見られた。また「グループで話し合いをすると、自分の考えたこととは違う意見が出て、なるほどな、と感じることが多かったです。それに自分と違う視点で考えを聞き、とても参考になりました」や「グループディスカッションでは、自分1人では気付かなかったことに沢山気付いて情報量を得ることができ、良い学びになった」など、他者の異なる意見を聞き視野が広がり勉強になったという感想を多くの学生が述べていた。さらに「年少さんと年長さんの言葉の発達には差があるということが改めてよくわかりました。(中略)保育者の言葉かけも違うということを改めて感じました」や「全体交流をやって、私は〇組(年長クラス:筆者)の子たちの観察しか知らないから、年中・年少組の観察の様子も知ることができて新鮮だった。年中・年少組とは関わるのがあまりないため3歳児、4歳児ならではの考え方、言葉の掛け方と年長との違いも学ぶことができた」などのように、言葉の発達の違いやそれに応じた援助の違いに気づくことがきたという内容の感想もみられた。

2015年度の授業実践からの改善点は、第一に保育者の援助についても考察するように指示をしたこと、第二に同じクラスを観察している学生同士でグループを編成したこと、第三に全体交流での発表を学年順に行ったことである。一点目に関しては、「(子どもの内面を:筆者)理解し、その子一人ひとりに合った声かけなどを行うことが保育者として大切だと感じました」や「子どもの内面を理解し、適切な援助を行うことは難しいと思いました」などの感想から、考察を通して学生自身が、子どもの内面を理解し、その上で一人一人の子どものに合った援助を行うことが必要だと感じることができたといえる。二点目に関しては、「自分が見れていなかった前後の様子や子

ども同士の関係を知ることができてその場を見ていただけでは分からなかった子どもの気持ちや考えを考察することができた」や「自分と同じ場面を見ていても、違う考察が出てきたり、同じ場所においても自分の知らない場面があったりと、色々な違いがあって面白かったです」などの感想があり、個別ワークの時とは異なる視点から考察ができ有意義なディスカッションになったことがうかがえる。三点目に関しては、先に紹介した感想や、また「子どもの行動や言動が学んでいる発達課程（ママ）に沿っている気がした。その援助も年齢によって変わっていて授業の大切さを知った。そして年齢だけでなく個人差もあり1人1人に合った対応が必要だと思いそんな保育者になりたいと思った」などの感想から、実際の子どもの姿を通して言葉の発達過程を理解し、それに応じた援助の必要性を感じることができたといえる。

(3)成果と課題

2015年度の授業実践の反省を踏まえて取り組んだ2016年度の授業では、それぞれの学生が子どもの内面について考察した上で、保育者の援助のあり方を考察することができた。また、グループの編成の仕方を工夫することでより深く議論ができ、全体交流の発表の仕方を工夫することで言葉の発達過程についても気づきやすくなったと思われる。しかし、保育指針や教育要領で示されているような「言葉で表現する力を養う」ということを念頭におきながら、言葉の発達過程に応じた援助のあり方を考察することは十分にできていなかった。

またグループ数が昨年より2つ増加したこともあり、全体交流では学生からの質問や意見をほとんど受けることができなかった。

5. おわりに — 今後に向けて —

2015年度と2016年度の授業実践を総合的にみて、学生は、子どもの言葉や表情、行動などから子どもの内面について考察すること、またそれに基づいて援助のあり方について考察すること、そして他者と意見を交換することで様々な捉え方や考え方に気づくことができ、授業の目的をある程度達成できたと思われる。その一方で、全体交流時には学生が質問をしたり意見を述べたりする時間を確保できなかったことが反省点として残った。さらに、実際の子どもの姿を通して言葉の発達過程を理解することはできたが、それに応じた言葉の発達の援助については十分に考察することができなかった。

以上のような反省から、グループディスカッションでは、全体で10グループ以下になるよう5、6人で一つのグループを編成し、全体交流では学生からの質問や意見を取り入れながら進めるようにしたい。さらに、言葉の発達過程を理解しながらそれに応じた援助について考察できるよう、本テーマの授業の前に行っている「乳幼児期の言葉の発達と保育者の関わり」に関する3回の授業と連続性をもたせることが必要であると考えられる。

今後も学生の授業への取り組み、また授業に対する感想を参考にしながら、子どもの言葉の発達を支え、子どもの意見表明権を保障する上で必要な態度を学生が習得できるよう授業を行っていきたい。